『ぬ』

私は、「ぬ」である。冗談でも、比喩でもなく、文字通りここに存在する「ぬ」である。私は五十音の中で最も使用頻度の低いひらがなであり、常に寂しさと疎外感を感じている。孤独である。私は今、真っ暗な箱のような場所にいる。ここは、外とも内とも言えない、海と川が共存する汽水域のような、空と宇宙を包含する大気圏のような場所である。私はたった一文字、この埃と砂の混じったような深淵の箱で考えに更けているのである。

「ぬ」から始まる言葉はどのようなものだろうか。

沼。ぬめり。盗人。ぬらりひょん。ぬりかべ。

ネガティブな言葉や、妖怪の名前しかないじゃないか。はぁ。

見ぬ。言わぬ。聞かぬ。

動詞と私一文字を組み合わせるだけで、途端に否定の意味に変わる。こんな扱いがあってもいいのか?私は他に等しく五十音に所属しているのに、使用頻度も低ければ、数少ない使われるときは不快な使われ方しかしない。こんなのは不公平ではないのか?なぜ私だけがこんな目に合わなければならないのだ?

突然、金属のこすれるような音がなる。「ぬ」の目の前にある暗黒のスクリーンが音とともに帳を上げる。外から差し込む朝日が黄色い背景の上に書かれた黒色の「ぬ」をゆっくりと下から照らしてゆく。夜が明けた。少し考えすぎたのかもしれない。朝日が完全に「ぬ」を包み込む。あぁ、忘れていた。これは、ぬくもり。